# ＩＳ＜インフィニットストラトス＞ファースト幼馴染は織斑一夏の恋人

巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ＜インフィニットストラトス＞ファースト幼馴染は織斑一夏の恋人

【Ｎコード】

Ｎ１０１５Ｙ

【作者名】

巧

【あらすじ】

リメイク前のＩＳ＜インフィニットストラトス＞ゼロ幼馴染は織斑一夏の婚約者！と内容は似ています、女オリキャラは入学してからいます。

## キャラ設定（前書き）

朝見た人はおはようございます。

昼見た人はこんにちわ

夜見た人はこんばんわ

初めての方もいると思いますので始めまして巧です。
ずっとスランプでやっと抜け出せたのでゼロ幼をリメイクしました、
楽しんでいただけたら嬉しいです。

## キャラ設定

女オリキャラ

名前　神代刹那（かみしろ せつな）

身長１５６．８

体重（作者が狙い撃つぜぇ！って言われながら粒子ビームを喰らったため作者の血痕で読めない）

スリーサイズ（作者がＧＮバズーカー、ハイパーバーストモードを食らったため作者の肉片がこびりついてよく見えないがＤよりのＣカップである事が判明）

性格は明るく、気立てもいい、炊事、洗濯、掃除何でもござれ。

原作との違い。

一夏の白式にＧＮドライブ搭載

セシリアさらにちょろくなるかも？

## キャラ設定（後書き）

これから徐々にですが更新していきます。

## 第一話こんな可愛い子が俺の彼女なわけが無い！（前書き）

タイトルはネタです（笑）まあ書くこともないので本編に行ってください。

## 第一話こんな可愛い子が俺の彼女なわけが無い！

「私が副担任の山田麻耶です」

「……」

この人が副担任？　子供が無理して大人の服着たって感じだぞ。

「で、では出席をとります」

すげぇ、今にも泣きそうだ、俺事、織斑一夏は今の状況を分析しました、あれ！？　作文！？

「織斑君、織斑一夏君」

「あ、はい」

「あ、あのね、織斑君の番なんだよね、挨拶してくれるかな？」

「ああ、はい」

俺は立ち上がり後ろに振り向く。

「織斑一夏ですよろしくお願いします」

な、なんだこのもっと喋ってよ見たいな空気は、俺は救援を求めて俺のファースト幼馴染事、彼女の神代刹那にアイコンタクトをする。

「（刹那、助けてくれ）」

「（助けてあげたいのは山々なんだけど、さすがにこの状況を打破るのは難しいかな？　）」

「（そんなぁ～）」

「（ごめんね、後でいっぱい甘えていいから）」

その言葉で元気が出てきました。

「以上です！」

教室にいた人がすっ転んだ（刹那以外）

「駄目でした？」

スパン！

「痛っ」

この痛み、たたき方、まさか。

「げぇ！？か、むぐぅ！」

刹那に口を押さえられました

「何をやってる神代、そして助かったな織斑」

「あ、あはははは、バカ一夏そんなこと言ったら叩かれるよ？　それといつもの呼び名も禁止」

俺は頭を縦に振った、あぶねえ、刹那に助けられたな。

「織斑先生、なぜ此処に？」

「私がここの教師だからだ、そして神代、席に戻れ」

「あ、は～い」

「諸君、私が君達の担任の織斑千冬だ、君達を弱冠１５歳を１６歳になるまでの一年間で鍛え抜き、使い物になる操縦士に育つように指導するのが仕事だ、逆らってもいいが、私の言う事は聞け、いいな」

千冬姉、めちゃくちゃだな、なんでクラスに居る女子（一部を除く）うれしそうなんだよ。

『刹那、このクラスには変態しかいないのか？』

「変態って」

「神代」

「はい？」

「そいつを喋らすなと言ったはずだが？」

「へ？　あ、すいません」

『待て、織斑千冬、悪いのは僕だ、刹那を責めないでくれ』

「織斑先生、この声一体どこから聞こえてきてるんですか？」
「ん？　ちょうどいい、神代、そいつに挨拶をさせろ」
「そいつってペットじゃないんですけど」
刹那は制服の袖をめくって白いブレスレットを露出させた。
「ティエリア」
『分かっている』
白いブレスレットから小さい男の人が出てきた。
『神代刹那の専用機『ガンダム』の人格Ａ・Ｉティエリア・アーデだ』
「「「「は？」」」」
『聞こえなかったか？　ティエリア・アーデだ』
「ＩＳが喋ってる！？」
「別に驚く事もないだろ、なんせＩＳのコアは４６７もあるんだからな、授業を始めるぞ」
「「「「は～い」」」」
素直だな、なんやかんやで一時間目の授業は終了した、え？　なん

やかんやってなんだって？　なんやかんやはなんやかんやだ！

「一夏♪」

「刹那、どうした？」

「用も無いのに話しかけちゃだめ？」

「いや、そういうわけじゃないけど」

「今の内にＩＳについて予習と復習してあげようと思って」

「おお、助かるぜ、サンキュー刹那」

「お礼はいいから参考書開いて」

「了解」

刹那はＩＳ学園に入学する前からＩＳについて教えてもらってたからそこまでみんなに遅れてるわけじゃない、刹那の教え方が結構うまいからだな。

「聞いてる一夏？」

「ああ、聞いてる」

「ちょっといいか？」

「ん？箒か」

「一夏知り合い？」

「ん？　ああ、幼馴染だ」

「一夏、この女は誰だ？」

「俺の幼馴染だ、箒がセカンド幼馴染で刹那がファースト幼馴染だな」

「ん？　箒？　どっかで聞いた名前のような？」

「知ってるのか、箒の事」

「ちょっと待ってあと少しで思い出せるから、そうだ！　篠ノ之箒、お師匠様の妹だ」

「お師匠様？　誰だ？　」

「束さんだよ、篠ノ之束さん」

「ねーさんを知ってるのか？　」

「ＩＳの事教えてもらったんだよね、あ、そうだ、箒って呼んでいい？」

「ああ、構わない」

「箒、一夏の事連れてっていいよ、時間ないし」

「感謝する」

「廊下でいいか？」

「ああ」

俺は箒を連れて廊下に向かった。

「一夏」

「ん？　なんだ？」

「神代いや刹那と呼んでいいのか？」

「いいんじゃないのか、刹那、そう言う事全く気にしないし」

「一夏、お前刹那の事が好きなのか？」

「は？　幼馴染だし普通だろ？」

「そう言う意味ではないのだが」

「？」

刹那に『ＩＳ学園に入ったら付き合ってる事秘密ね』って言われてるから言えるわけないよな。

「まあいい」

「久しぶりだな、六年ぶりだけどすぐにわかったぞ」

「そうか」

「髪型も変わってないしな」

なぜか睨まれた、俺怒らせるような事言ったか？

「そろそろチャイム鳴るな戻るか」

「あ、ああ」

俺は箒を連れて教室に戻った。

## 第二話妖精（フェアリー）ってなんですか！？（前書き）

最近更新できなくてすいません、風邪をひいて寝込んでました、もともと体はそんなに強くなく、なかなか治らなかったんですけどやっと治ったんでこれから徐々にですが更新していきますながながすいませんでした。

## 第二話妖精（フェアリー）ってなんですか！？

今、二時間目の授業中だ、刹那に教えてもらってたから難なくついていける。

「織斑君、何か分からない所がありますか？」

ピンポイント！？　なぜに俺だけ！？

「大丈夫です、参考書のだいたい八割がた理解してますから」

「あ、そうですか」

「織斑、お前参考書はどうした？」

「ここにありますけど」

机の中から参考書を取り出す、実はこれは刹那のだ。

「ふむ」

「あ」

参考書を奪われたってまずくね！？

「ほう、お前にしては綺麗な字だな、それに旨くまとめてある」

「で、でしょ？」

「とりあえず一回逝っとくか？」

字が違うだろ、まあ、やることは一つだ。

「心の底からごめんなさい」

「はぁ～、ティエリア頼みがある」

『なんだ？』

「私の机にこういうこともあろうかと用意しておいた参考書が置いてあるから取って来てくれないか？」

『わかった』

刹那のブレスレットから光が漏れたかと思ったら刹那の机の横に紫の髪の美少年が立っていた。

『すぐにとってくる』

「ああ、頼んだぞ」

「刹那のＩＳ、あんなこともできたんだな」

「まあね」

「授業を続けるぞ」

授業が終わり、ティエリアが参考書を持って来てくれたので、それを使って勉強してる。

「さて、問題です世界にあるＩＳのコアは何個でしょう？」

「俺をなめすぎだろ、４６７個だ」

「正解」

これは常識だよね～と言って笑う刹那は本当にかわいいと思う、やべえ、俺完全に刹那に惚れ込んでる。

「！　一夏こっちきて」

「え、でも勉強」

「いいから、大事なようがあるの」

「？　わかった」

刹那が俺の手を握って教室をで、空き教室に連れ込む。

「どうしたんだよ、刹那、こんなところに連れ込んで」

「え？　そのセシリアオルコットっていういかにも今の世界に染まってる人が来てたから一夏を不快な思いにさせたくなくって、そ、その迷惑だったかな？」

「いいや、迷惑じゃないさ、ありがとう、刹那」

刹那の頬に俺は手を添えると目をつぶって、その手にすり寄ってきた。

「ん……／／／」

うれしそうにほほを染める刹那、なんて言うか、パネェ！　マジパネェ！

「やっぱりかわいいな、刹那」

「ふぇっ！／／／」

顔を赤くする刹那って。

「まさか声に出てた？」

「（こく）／／／」

顔を赤くして頷く刹那、なんだこう小動物を見てるようだ。

「そ、そのチャイム鳴るからもう戻ろうか」

「あ、ああ、そうだな」

刹那と一緒に教室に戻り、三時間目の授業が始まった。

「ああ、そうだ、クラス代表を決めなくてはいけないな、自薦他薦は問わん誰かいるかちなみに選ばれた奴は責任もってやれ、誰か推薦したい奴居るか？」

俺以外ならだれでもいいや。

「はい、織斑君を推薦します」

「私も」

へぇ～俺以外に織斑って名字の子いたんだってんなわけあるかぁ！

「お、俺！？」

「まさかお前自分以外に織斑の名字の奴がいると思ってたのか？」

「イヤソンナコトナイヨーってそんなことやってる場合じゃねえ俺は「一夏やってくれないの？（涙目上目づかい）」ぜひやらせてくださいというかおねがいします」

「神代ナイスだ」

「（グッ！）」

隣でサムズアップする刹那。

「納得がいきませんわ！」

立ち上がる金髪ドリルっていうかこいつが刹那の言ってたセシリアオルコットか？

「そのような選出は認められません！　だいたい、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリアオルコットにそのような屈辱を一年間味わえというのですか！？」

言いすぎじゃね？

「実力から言えばわたくし、セシリアオルコットがなるのは当然ですわ「オルコットおまえなにか勘違いしてないか？」勘違い？」

「このクラスにはお前以上に実力が上の奴がいる」

「誰ですの？」

「『神秘な妖精（ミステリーフェアリー）』といえば分かるか？」

「『神秘の妖精（ミステリーフェアリー）』今最も世界最強『ブリュンヒルデ』に近いと言われてるＩＳ操縦者ですか？」

「そう『踊る妖精（ダンシングフェアリー）』とも言うな」

「ちふじゃなかった織斑先生その『神秘の妖精（ミステリーフェアリー）』とか『踊る妖精（ダンシングフェアリー）』ってなんですか？」

「ん？　それぐらい知っておけ、まあいい、日本の国家代表候補生だ、もっとも日本の国家代表になってほしいそうだが本人が『まだ私１５歳ですよ？　国家代表は早いと思います』と言って断ったがな」

「ふ～ん、でそれって誰なんだ？」

「お前の隣で船をこいでいる奴だ」

俺の隣を見ると船をこいでいる刹那、頭が下がるたびはっと起きる姿がかわいらしい。

「とりあえず写真とっとこ」
携帯を取り出し写真を一枚撮った。
「おい、神代寝るなよ」
「ふぁ～い（うつらうつら）」
「お、織斑先生、神代さんが『妖精（フェアリー）』って本当なんですか！？」
「落ち着いてください山田先生それに事実です」
さっきとった写真を待ち受けにしておこう。
「ちょうどいいお前に聞きたいことがある」
「聞きたいこと？」
「お前、神代と付き合ってるのか？」
「は？　刹那と俺が付き合ってる？　いや物心つく前に一緒にいたからどっちかと言うと妹かな？」
「神代、強く生きろ」
ふぅ、ばれなかったか。
「確かに神代さんならクラス代表にふさわしいですがその男は別ですわ」

「ふにゃ…にゃ…（うつらうつら）」

『刹那がクラス代表決定戦をやればいいんじゃないか？　と言ってるその場合は自分が一夏を鍛えると』

「ふむ、それも面白いか、よし一週間後クラス代表決定戦をやる、いいな」

「「「「「はい」」」」」

「ふにゃ～（うつらうつら）」

そんなこんなで放課後、え？　そんなこんなって何だって？　そんな、ん？　これ前にもやったな、ちなみに刹那は昼がまともに食えないくらい眠そうだったため俺が食べさせた、放課後になった瞬間ティエリアにおんぶされて教室を出て行った。

「さて帰るか」

「よかった、織斑君まだいたんですね」

「何か用ですか？」

「織斑君の寮が決まったんです」

「へ？　俺当分自宅から通うんじゃないんですか？」

「最初はそうだったんですけど上からの命令で急遽決まったんです」

「そうですか、一人部屋ですよね？」

「そんなわけないだろ、二人部屋だ」

千冬姉が現れた！

織斑一夏はどうする？

コマンド

？戦う

持ち物

ポ〇モン

逃げる

「私はポ〇モンか」

頭を叩かれた、優しくだけど

「まあいいです相手は誰なんですか？」

「行ってみればわかる」

「でも荷物が家に」

「持って来てやった携帯の充電器とかだけな」

なんつー、大雑把、まあいいか。

「じゃあ失礼します」

「道草食っちゃだめですよ」

「大丈夫ですよ」

寮に行くまでの道を歩く、後ろに大量の女子が付いてきてる、まあね、寮はまでの道だし当然なんだけど視線がすごい痛い。

「ここか」

扉を開けると高級ホテルみたいだった。

「すっげぇー、こんなところに住めるのかよ」

『誰かいるの？』

この声は！？

「ああ、同じ部屋の子か、はじめまして私は神代「刹那？」ほぇ？」

そこに居たのはバスタオルを体に巻いた、俺の彼女だった。

「刹那、向こう向いてるから服着てくれ」

「へ／／／」

俺は刹那の方から壁の方に目を向けた。

「一夏のエッチ／／／」

「なんでそうなる！」

「もういいよ／／／」

「お、おう」

「そ、その何か言って？／／／」

「……」

何も言えないのは似合って無いからじゃない、似合いすぎてるからだ、いつもは肩のところで二つに縛ってあるのに縛らずにストレートにしてあってそれが青に白の水玉の浴衣がすげえ似合ってる。

「い、いやそのすげー似合ってる」

「あ、ありがとう／／／」

「と、とりあえず晩飯食べに行くか」

「う、うん／／／」

俺が立って扉に向かうと刹那が俺の服の裾を掴んできた。

「刹那」

「その私今顔真っ赤で見られたくないから／／／」

前略千冬姉へ、彼女がかわいすぎて胸が苦しいです。

「わかった、ちゃんと掴んでおけよ」

「……うん／／／」

晩飯を食べた後明日からの訓練をどうするか決め眠りに就いた。

## 第三話訓練はいろいろ危険

俺達は食堂で朝ごはんを食べてる。

「一夏」

「ん？　なんだよ、箒」

なぜか知らんが箒が切れてる。

「一夏……ご飯・・・・・・」

「ん？　はいはい、あーん」

ぱくっと差し出された白米を食べる刹那。

「なぜ刹那に食べさせてやってるんだ？」

「ん？　ああ、ティエリアの話だと深夜まで何かを製造してたみたいで食べさせないと寝ちゃうから」

「なにか？」

「ああ、俺も教えてもらって無いなんでもセシリア戦の時に必要になるものだって聞いてる」

「一夏……お味噌汁……」

「ほい」

味噌汁を持って刹那の口にくっつけると刹那はゆっくりそれを飲み始めた。

「俺のために徹夜してもらったんだからこれくらいはしてやらないとな」

「一夏……大好きだよ……／／／」

「ん？　刹那！？　寝るなよ！？」

「織斑君となりいいかな？」

「ん？　構わないけど」

「一夏、私は先に行くぞ」

「ん？　おう」

「一夏……お魚……」

「はいはい」

魚をほぐして刹那の口元まで持っていくと白米の時と同じようにぱくっと食べた、うん、すげえかわいい。

「なんで織斑君、神代さんに食べさせてるの？」

「ああ、俺のために徹夜したらしいから眠そうだったし食べさせることくらいはしてやろうと思って」

「織斑君と篠ノ之さんって仲良いの？」

「まあ、幼馴染だからな」

「そうなんだ」

「ん～～」

俺の膝の上で大きく背伸びをする刹那。

「ん？　刹那起きたか」

「うん、なんで私一夏の膝の上に居るんだろう？」

「お前が眠そうだったから食わしてたんだ、半分以上寝てたから分かってないと思うけど」

「ありがとう」

頬笑みながら俺の膝から隣に座りなおす刹那、すげえかわいい。

「刹那早く食わないと授業に遅刻するぞ」

「うん、分かってるけどふぁ～」

「お前昨日何時まで起きてたんだよ？」

「三時頃まで起きてた」

「三時？　睡眠不足は体に悪いぞ？」
「分かってるよ、徹夜したおかげで完成したし」
「完成したのか？」
「うん」
刹那は足元に置いてあったバックのチャックを開けた。
「白ハロ」
［ナニ？　ナニ？］
「刹那なんだ、それ？」
「ハロだよ、一夏はまだＩＳに関しては素人だからハロは戦闘のサポートしてもらうために作ったの」
［イチカヨロシクネ、イチカヨロシクネ］
「戦闘のサポートっていいのかよ」
「今の一夏を一週間鍛えてもオルコットさんに勝てるとは思えないもん」
「うっ！　それを言われるときついんだが」
「まあ、ハロに戦闘のサポートしてもらうのは最初だけだよ、オルコットさんとの戦いのとき使っちゃだめだけど、一夏へのプレゼン

トはもう少し後だから」

「プレゼントってハロじゃないのか？」

「全然違う一夏に上げようとしてるのは今のＩＳの常識を覆すものだよ」

「ＩＳの常識を覆す？」

「今言えるのはそれだけだよ、ごちそうさま」

「ごちそうさま」

ＩＳの常識を覆すって刹那頭いいけどいったい何を作ってるんだ？

「ほら一夏行くよ？」

「今行く」

俺は食器をかたして教室に向かった。

「そうだ織斑、お前に専用機が支給されることになった」

「俺に専用機？」

［ヤッタナイチカヤッタナイチカ］

ハロが俺の頭の上で羽（？）をパタパタしてる。

「……織斑何だ、それは？」

「ハロですけど」

「まあいいでは授業を続ける」

それからすぐにセシリアが挑発しに来たり箒が束さんの妹だった事でごたごたが起りました。

「じゃあ打鉄を装着して」

「了解」

絶賛トレーニング中所で知ってるかＩＳスーツ肌にフィットするように作られてるんだぜ、俺が何が言いたいのかと言うと目の前の俺の彼女のエロさが半端ないです。

「一夏どうかした？」

「い、いやなんでもない」

「？　まあいいかじゃあ始めるよ」

「あ、ああって言うか刹那お前ＩＳは？」

「へ？　忘れてたえっとフラッグでいいか」

「フラッグ？」

「私のガンダムの名前みたいなものかな？」

『了解した、ＳＶＭＳ－０１０オーバーフラッグ展開する』

刹那の全身が光に包まれ黒い機体が現れた。

「全身装甲のＩＳ」

「じゃあ始めるよ、私が射撃するからひたすら避けてもらうからね」

「了解」

刹那が空に飛んで俺も同じように飛び立つ。

「行くからね」

「来い！」

刹那が射撃を始めて俺がそれを避ける。

「くっ！　これ結構むずかしいぞ」

「ほら気をつけないと当たっちゃうよ？」

「くそっ！　かわいいかわいい彼女が今は怖いな」

「か、かわ……いい？／／／」

「どうした射撃がなくなったぞ？」

「い、一夏のばかぁー！／／／」

照れた刹那にぼこられました。

「痛っててて、絶対防御を貫通するまで殴らなくてもいいだろ」

「一夏が悪いんだよ、あんな事言うから」

「悪かったって機嫌直せよ」

「ふ～んだ」

絶賛不機嫌中。

「一週間この訓練をやり続けるからね」

「一週間もやるのかよ」

「オルコットさんに負けてもいいならやらなくてもいいけど」

「ぜひやらせてくださいお願いします」

「よろしい」

「飯食いに行こうぜ」

「もうしょうがないな」

俺達は着替えてから食堂に向かった。

「さっきの訓練意味あるのか？」

「あるよ、オルコットさんのＩＳは射撃型だったらすべての射撃を避ければ勝てる」

「おいおいそういう事ばらしていいのかよ」

「見たら一目でわかるから無問題」

「そういうもんかよ」

「そういうもん」

「あっそ」

この後箒と一緒に晩御飯を食べクラス代表決定戦までひたすら射撃を避ける訓練をした。

## 第四問セシリア戦とおまけの刹那戦（前書き）

砂糖を吐いてくれたら嬉しいです。

## 第四問セシリア戦とおまけの刹那戦

「なあ刹那、箒」

「なに？」

「なんだ？」

今俺達はビットに居る。

「俺の専用機まだ来ないのかな」

「「私達に聞かないで（聞くな）」」

「ですよねー」

俺の専用機ってどんな奴なんだろう？

「織斑君織斑君織斑君」

ヤンデレ！？

「先生落ち着いてください」

「あ、はい来ました織斑君の専用ＩＳ」

ゲートが開いて俺はそこにあるものを見たそこにあるのは『白』だった。

「織斑君の専用ＩＳ『白式』です」

「白式」

俺は白式に手を触れてみる。

「分かるこれが何のためにあるのか理解できる」

「そうだ背中を預ける感じでいい」

刹那が不安そうな表情で見てるのが分かる。

「織斑時間がない初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）は実践でしろ、篠ノ之行くぞ」

「え！？　ちょっとまっ、ええい一夏負けたら承知しないぞ！」

「脅しかよ」

「その一夏私の方に顔近かずけてくれる？」

「ん？　ああ」

俺は刹那に言われた通り顔を刹那に近ずけた。

「ん……／／／」

「んん！？」

今俺に起こった事を説明するぜ、刹那に顔を近ずけてと言われたから近ずけたら刹那がいきなり俺にキスしてきた何を言ってるか分か

らないと思うが俺もよくわからない頭がおかしくなりそうだというか恥ずかしがり屋な刹那がこんなことするとは思わなかった。

「そ、その私のファーストキスあげたんだから勝たないと怒るからね／／／」

「あ、ああ行ってくる／／／」

「リニアボルテージ上昇、射出タイミングを織斑君に譲渡します」

「了解、白式、織斑一夏出る！」

ハッチから出るとそこにはブルーティアーズを身に纏ったセシリアがいた。

「あら逃げずに来ましたのね」

「……」

開口一番がそれかよ。

「まあいいですわチャンスをあげますわ」

「悪いが結構だ、刹那からすごくいい物を貰ったんで負ける自信はない」

「そうですかではお別れですわね！」

ビームが俺の左足を捉える前に動いて避ける。

「なっ！」

「あいにくと射撃を避ける訓練ならこの一週間嫌って言うほどやったんだ、刹那の射撃に比べれば止まって見えるぜ、セシリアオルコット」

「踊りなさいわたくしセシリアオルコットとブルーティアーズが奏でるワルツで」

「あいにくと盆踊りの方が得意だし先客がいる！」

セシリアが射撃してくるので俺はすべてを避ける。

「なんで当たらないんですの！」

セシリア怒り心頭いい気味だ。

「確かファーストシフトまで射撃を避け続けりゃいいんだよな」

俺は刹那が訓練中に言ってた言葉を思い出す。

『一夏、いい？　ファーストシフトしないとＩＳは本来の力を発揮しないんだよ』

『じゃあファーストシフトまで時間稼がなきゃいけないのか』

『ところがぎっちょん今から教える技をやればファーストシフトまで待たなくても攻撃はできる』

『技？』

『ちゃんと見てるんだよ？』

あの技を叩きこめばダメージは与えられる。

「いつまで逃げてるつもりですの！？」

「さあ？　いつまでだろうな！？」

～刹那ＳＩＤＥ～

一夏ちゃんと私が教えた通りに操縦できてる。

「神代」

「え！　は、はい何ですか？」

「あいつのあの動き方お前どんな練習をあいつにしたんだ？」

「えっとまず射撃を避ける練習とそれから二連加速（クイックブースト）と回転加速（ターンブースト）それに瞬時加速（イグニッションブースト）を教えました」

「なるほどあいつは回転加速（ターンブースト）を狙ってるのか」

「刹那その回転回転（ターンブースト）とは何なんだ？」

「その名の通り回転つまり瞬時加速（イグニッションブースト）で一気に相手の隣に行った瞬間に体を無理やりねじって回転しつつ加速するんだよ、近接型の白式なら有効に使えるから」

「だがそれでは」
「体に予想以上に負荷がかかるだから一試合につき使えるのはたった一回って制限をかけた」
「では二連加速(クイックブースト)はなんだ？」
「それは回転(ターン)より簡単瞬時加速(イグニッション ブースト)を二回連続でするだけ」
「難しくないか？」
「全然」
「そうか」
『行きなさい、ブルーティアーズ！』
『いっ！こんなの聞いてねぇ！』
あ！　ビットの事教えるの忘れた。
『しょうがねえ武器は、はぁっ！？剣一本！？』
一夏はその剣でビットを切り始めた。
「神代準備しておけ」
「了解です」
私はある準備のために一夏が発進したハッチとは逆のハッチに向か

った。

〜一夏ＳＩＤＥ〜

くそっ！　回転加速（ターンブースト）が使えない。

「２７分持ったほうですわね」

「シールドエネルギーは４０程度しか削れてないのによく言うな」

セシリアは俺の態度が気に食わなかったのか鼻を鳴らした。

「まあこれでフィナーレですわ」

俺は展開しておいた剣を握りしめる。

「左足いただきますわ！」

「くっ！」

レーザーが俺の脚に当た――――

「ところがぎっちょん！！」

らなかった、あたる瞬間に瞬時加速をしてセシリアに突っ込む。

「なっ！　瞬時加速！？」

「もらったぁぁぁぁ！」

「あいにくブルーティアーズは六機ありましてよ」

ブルーティアーズからその姿からは似合わないミサイルが飛んでくる。

「ところがぎっちょん！　刹那直伝！　二連加速（クイックブースト）！」

「二回連続の瞬時加速！？」

俺はセシリアの右側に進み通過する前に無理やり体をねじりながら加速して剣でセシリアの背中を切った。

「きゃっ！」

セシリアは攻撃があたり衝撃で小さく悲鳴を上げた。

「むちゃくちゃやりますわね」

「あいにくとむちゃくちゃな事するのが得意なんでね」

でも瞬時加速と二連加速に回転加速も使ってエネルギーが残り少ない。

「このままじゃ負けるな」

力がもっと欲しい、そう願った瞬間白式がアーマーが消えまた展開する。

「な、なんだ！？」

そして白式は俺の願いに呼応するように真の姿で現れた。

「まさかファーストシフト……！？　あなたまさか今まで初期設定のＩＳで戦ってましたの！？」

俺の目の前にディスプレイにある名前が現れる。

「雪片弐型」

雪片って千冬姉が使ってた刀が今俺の手にある。

（力が欲しくないかい？）

突然アリーナのスピーカーからそんな声が聞こえた。

「あなた誰ですの！？」

（君には聞いてない僕はそこに居る織斑一夏に聞いてるんだ）

「俺に？」

（君はなぜそこまで力を欲する）

「……人がいるから……俺の千冬姉と箒、俺の身の回りに居る人を守りたいから」

（本当にそれだけなんなのかい？）

「え？」

（居るんだろうその人のためなら死んでもいいと思える人が）
その言葉を聞いた時俺の頭の中に笑いながら俺の名前を呼ぶ刹那が思い浮かんだ。
「ああ、命を賭けて守りたい人がいる」
（ふふ、その言葉を待っていた、刹那が見込んだ男だけはある）
「刹那が？」
（受け取れ一夏、刹那からのプレゼントだ、ＧＮドライブリポウズ解除）
「ＧＮドライブ？」
白式の後ろにあった突起物からいきなり緑色の光が漏れだした。
「これは……」
（それがＧＮドライブだ）
「これがＧＮドライブ」
（君ならそれを人を傷つけるためではなく守るために使うと信じてるよ）
「ああ」
「ここまで背中を押してくれてるんだ、勝たなきゃ男じゃねえよな」

俺は一気に加速してセシリアに突撃する。

「は、はやい！」

「うおぉぉぉぉぉ！」

雪片で思いっきり切る！

『勝者織斑一夏』

セシリアのエネルギーが尽きたのか俺の勝利宣言をした。

「勝ったのか？」

（勝ったんだよ）

いきなりティエリア？がディスプレイに映る。

「うおっ！　びっくりした、やめろよ、ティエリア心臓に悪い」

（違うよ、僕の名前はリジェネレジェッタ）

「リジェネでいいのか？」

（気軽にそう呼んでくれ）

「そうかわかった」

『オルコットビットに戻れ、織斑はそこに居ろ』

「あ、はい分かりました」

「了解」

『リニアボルテージ上昇、射出タイミングを神代さんに譲渡します』

『了解、ガンダムエクシア、神代刹那出る』

そんな声を白式が拾い向こうのビットから青と白を基調としたＩＳが後ろから緑色の光を出しながら出てきた。

「全身装甲（フルスキン）のＩＳって事はもしかして刹那？」

「そうだよ、さ、始めようか」

「始めるって何を？」

「決まってるでしょこの一週間の訓練の成果見せてもらうよ」

「なるほどでもこの前のＩＳと姿が違わないか？」

「これはＧＮ００１ガンダムエクシア」

「ガンダムエクシア……」

「ガンダムエクシア、神代刹那、目標を駆逐する」

決め台詞なのか刹那がそのセリフを言ったでも結構かっけえな。

「白式、織斑一夏、目標を切り裂く」

～千冬ＳＩＤＥ～

『白式、織斑一夏、目標を切り裂く』

「さあ織斑がどうやって神代の相手をするのか見ものだな」

「織斑先生さっきから気になっていたんですがあの緑色の光はなんなんでしょうたしかＧＮドライブって言ってましたけど」

「私でも詳しい事は知らん、知っているのはＧＮドライブという名前と放出してるのはＧＮ粒子と呼ばれるものだと言うだけだ」

「ＧＮ粒子？」

「ああ、これは束から聞いた話だがＩＳはＧＮドライブを搭載して初めて完成するそうだ」

「ＧＮドライブを搭載して始めたＩＳは完成する！？」

「ああ、つまりガンダムと白式は完成したＩＳという事だ」

「でもなぜ他のＩＳには積まれてないんですか？」

「理由は三つある、ＧＮドライブを作れるのは神代刹那だけだからだ、あいつの兄に神代ライルという男がいるがライルもＧＮドライブは作れないむろん束もな」

「篠ノ之博士でも」

「ああ、積まれてない理由はそれが一つ目だ、二つ目は神代本人がそれをＩＳに搭載するのをためらってるんだ、新たな戦争の火種にしかならないからな三つ目はＧＮドライブと相性がいいＩＳがないんだ」

「相性？」

「ＧＮドライブとＩＳにも相性があってな、相性が悪いと機能を上げるどころか逆に足を引っ張る」

「なるほどだから今のＩＳに搭載されてないんですね」

「ああ、そういう理由があって今のＩＳには搭載されてない」

今のあいつでどこまで刹那の相手ができるのか面白そうだ。

『もらったあぁぁぁ！』

『甘い！』

一夏が切りかかった瞬間刹那に腹を蹴られ一夏が吹き飛んだ。

『よし一夏さっきのオルコットさんとの戦いが活かされてるか試すけどいいよね？』

『せ、刹那さん？　なんで切れてるんでしょうか？』

『うん、切れてないよ、オルコットさんとの戦いを見てて一夏が楽しそうに戦ってたからオルコットさんに嫉妬してこういうことやっ

てるわけじゃないからね』

『おい！　それが本心だろう！？』

だろうな。

『ツヴァイ』

『了解、ＧＮＷ－０２ガンダムスローネツヴァイ、展開する』

エクシアが消え新たにオレンジを基調とするＩＳが現れた。

『なんじゃそりゃ！？』

『ガンダムスローネツヴァイ、ガンダムの姿の一つだよ』

『どれだけあるんだよ、ガンダムの姿』

『逝けよ、ファングゥ！』

『キャラが違いませんか！？』

「ごもっともだな」

結局この後織斑は神代に叩きのめされていた。

～一夏ＳＩＤＥ～

「あの刹那？」

「何、一夏？」

「いつまで抱きついてるつもりなんだ？」

「あと少し」

そう言って刹那は俺の胸に顔を付けてぐりぐりしてる。

「なあ、箒、なぜそんなに俺を睨む？」

「自分の胸に聞け」

その後また電話帳をもらい今は寮に居る。

「一夏、オルコットさんに勝ったご褒美あげないとね」

「ご褒美ってな、んん！？」

「ん……／／／」

いきなり刹那のドアップな顔が現れたそして刹那の唇の柔らかさってはいぃぃぃ！？

「せ、刹那？／／／」

「……／／／」

顔を赤らめて俺の胸に顔をぐりぐりする刹那、いや、可愛いんだけどというかかわいすぎて食べちゃいたいくらいなんだけど。

「刹那、顔を上にあげろ」

「ん？　なに、ん……／／／」

俺達はこの後何度もキスして晩御飯を食べたらまたキスをして同じベットで眠った。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1015y/

---

ＩＳ＜インフィニットストラトス＞ファースト幼馴染は織斑一夏の恋人

2011年12月11日21時54分発行